



昭和26年1月31日宗務総長就任の様子(左から稲葉道意・金倉儀一・参務・暁烏敏総長・鳥越頼有秘書)

員中より選出すべしという強い意見があったが、訓覇氏を中心に新人議員たちの推進力もあり、全宗門を挙げて迎えられる人という事に傾いていった。

もいう財政的困窮と、10年後にお迎えする宗祖700回御遠忌のお待ち受けの準備、そして何よりも法義相続の衰退という大きな問題がそこにあった。しかし、師は

浅いが、財政紊乱のことなどは大したことはないと思います。根本の信念が燃えたとてくるならば、赤字経済も憂うるに足りません。さらに「宗門護持のためには、財力を要するのは申すまでもないが、正信念仏の心から湧き出てくるものと信じております。私たちは、一にも信心、二にも信心、三

にも信心、どこ迄も信心為本の骨折によつて、すべてが解決していくものと信じております」「我宗門は大飛躍のときに際会しております」(宗門各位に告ぐ1951(昭和26)年「真宗」第577号)と師の信念は宗門を超え世界に公言された。

師は総長役宅には入らず、大師堂(現在の御影堂)の後ろにある、控えの間として使われていた3室に泊まり込み、晨朝勤行と晨朝法話を日課とし、総長室で一日中上山してこれた多くの御門徒と面会され、話をよく聞いておられたという。

「説教者になるな、決して説教するな。聞く人となれ、いつでもどこでも如来の声を聞き得る人となれ」と師は常々語っていたという。

ここに真宗同朋会運動が興った直接的原点があるのではないだろうか。(つづく)

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」

教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第49回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

しんらんweb

検索

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 興り(十)

念仏総長と称された暁烏敏師 (その4)

教化本部 古卿 誠幸

それまで寺務総長という名称であったが、1929(昭和4)年1月に宗制寺法が改定され、真宗大谷派宗憲を發布し、同年12月大谷派宗憲施行により「宗務総長」となった。暁烏敏師は、そこから数えると10代目宗務総長に就任した事になる。

本来ならば宗務総長は、宗議会議員の中から選出されるものである、しかし選挙規則が特にならぬに、毎回醜悪な選挙運動がなされてきたという。その内情を知った新人議員(各地からの選出)は憂畏の念を持っていた。総長候補は安田力氏、稲葉道意氏、末広愛邦氏の三氏であったが、最終的に

は、稲葉、末広両氏の激しい争いとなつていった。そんな中、若手革新議員から「最近の本宗団はその生命とする念仏が足らんことを一大欠点とする。よろしく念仏をとり戻せ!」という宗団革新運動の気運が高まり、次第に暁烏敏師待望論が興つていった。たちまち新人議員30名と暁烏師の郷里、北陸出身議員の賛成を得、議員の大多数の賛同を得る見込みとなり、早速、全議員懇談会にその議が上程された。その会議上で、先ず末広氏、次いで稲葉氏の辞退発言があり、満場一致で暁烏敏師の総長推挙が決定した。

宗務総長候補として暁烏敏師の名を初めに口にしたのは、蒲池繁氏であった。「偶々1月24日の夜半、私の枕辺に暁烏翁の端坐せられる夢をみた。実はこの夢が唯事ならぬ夢であり、ここに暁烏総長出現の幕が切つて落とされたと言つてよい」(「夢物語」蒲池繁。蒲池氏が最初に賛同を求めたのは、訓覇信雄氏である。総長は議